

北海道で！縄文を知る

第12回

：縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉
大船・垣ノ島遺跡で！かつてにフットパス



川汲峠地藏堂^㊸にて(自撮り)

小杉 康 (こすぎ やすし)

北海道大学大学院文学研究院考古学研究室特任教授

1959年埼玉県生まれ。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学(考古学専攻)。日本学術振興会特別研究員、国立歴史民俗博物館外来研究員、明治大学文学部助手、北大大学院教授を経て、現職。主要著書に『縄文のマツリと暮らし』(岩波書店)、『縄文時代の考古学』全12巻(共編著、同成社)、『はじめて学ぶ考古学』(共編著、有斐閣)、『生業としての交易活動』(考古学研究、第198号)、など。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

縄文世界遺産で〈かつてにフットパス〉も、いよいよ最終回、ラスト・ウォークです。今回は函館(旧南茅部町)の大船遺跡^{おおふね}と垣ノ島遺跡^{かきのしま}を目指して歩きます。と言っても、スタート地点のJR鹿部駅^{しかべ}①とゴール地点の函館駅^㊸⑨までの歩行距離は70km弱になりますので、2日間にわたっての行程です。歩行距離の都合で、第1日目に大船・垣ノ島の両遺跡を訪れます(歩行距離：約28km)。第2日目はゴールを目指しての帰途の歩行です(歩行距離：約40km)。遺跡から最寄りのJRの駅が無いので、公共交通機関としてバスを利用するの1日のコースとしてもいいのですが、今回のフットパスの締めくくりとしては、やはり「歩く」ことにこだわりました。

さて、本シリーズが始まり、最初の〈かつてにフットパス〉でキウス周堤墓群(千歳市)を歩いた記事が

本誌(No.709)に掲載されてすぐに、NPO法人「ふらっと南幌」の代表の方から連絡をいただき、同会では松浦武四郎著『夕張日誌』の足跡をたどり、千歳駅から道庁舎にまで至るロングトレイル「縄文古道と松浦武四郎の観た世界」(5日間)を毎年10月頃に実施しているとのことでした。その前半のコースがここで紹介した〈キウス周堤墓群で！かつてにフットパス〉と重なるところも多く、先輩方の果敢な取り組みに脱帽です。また、〈北黄金貝塚^{きたこがね}で！かつてにフットパス〉では、遺跡の近くに住むTさんから、掲載したイラストマップを片手にコースを歩いたとのお便りをいただきました。ここまでひとりトボトボと歩いてきて、なんともうれしい連絡やお便りですが、肝心の私が所属する考古学研究室の仲間からは一向にその声が上がらず、無理強いもできませんので、静かに歩き納めようと思っていました。そんな思いを知ってか知らずか(きっと考古学徒としての知的好奇心と心意気からだと思えます!)、今回のフットパスには考古学専攻生4名が参加してくれました。

大規模記念物

これまでも紹介してきたように縄文文化の特色を一言で言うならば、温暖化した後氷期^{こうひょうき}の海浜環境と森林環境に適應した、定住する狩猟・漁撈・採集^{ぎやうりう}民の文化です。これに高度に洗練された土器や木器、漆などの工芸技術や、独特な土偶造形に代表される精神文化などの特徴が加えられます。また、特定な時期や地域のエピソードとしてストーンサークル^{うるし}(鷲ノ木遺跡；本誌No.715参照)や周堤墓(キウス周堤墓群；本誌No.709参照)、盛土遺構^{もりど}といった大規模な遺構について説明されることもありましたが、これらの大規模な遺構は縄文を彩るエピソードとして語られるだけのものではなく、これらこそがまさに縄文文化の後半期を特徴づける遺構・遺跡であることが、近年の調査・研究成果として明らかになってきました。これらの築造にはかなりの年月がかかり、縄文の当事者にあってもその存在をもって同時代そして後世へと伝えるメッセージが込められたものと評価して、私は「大

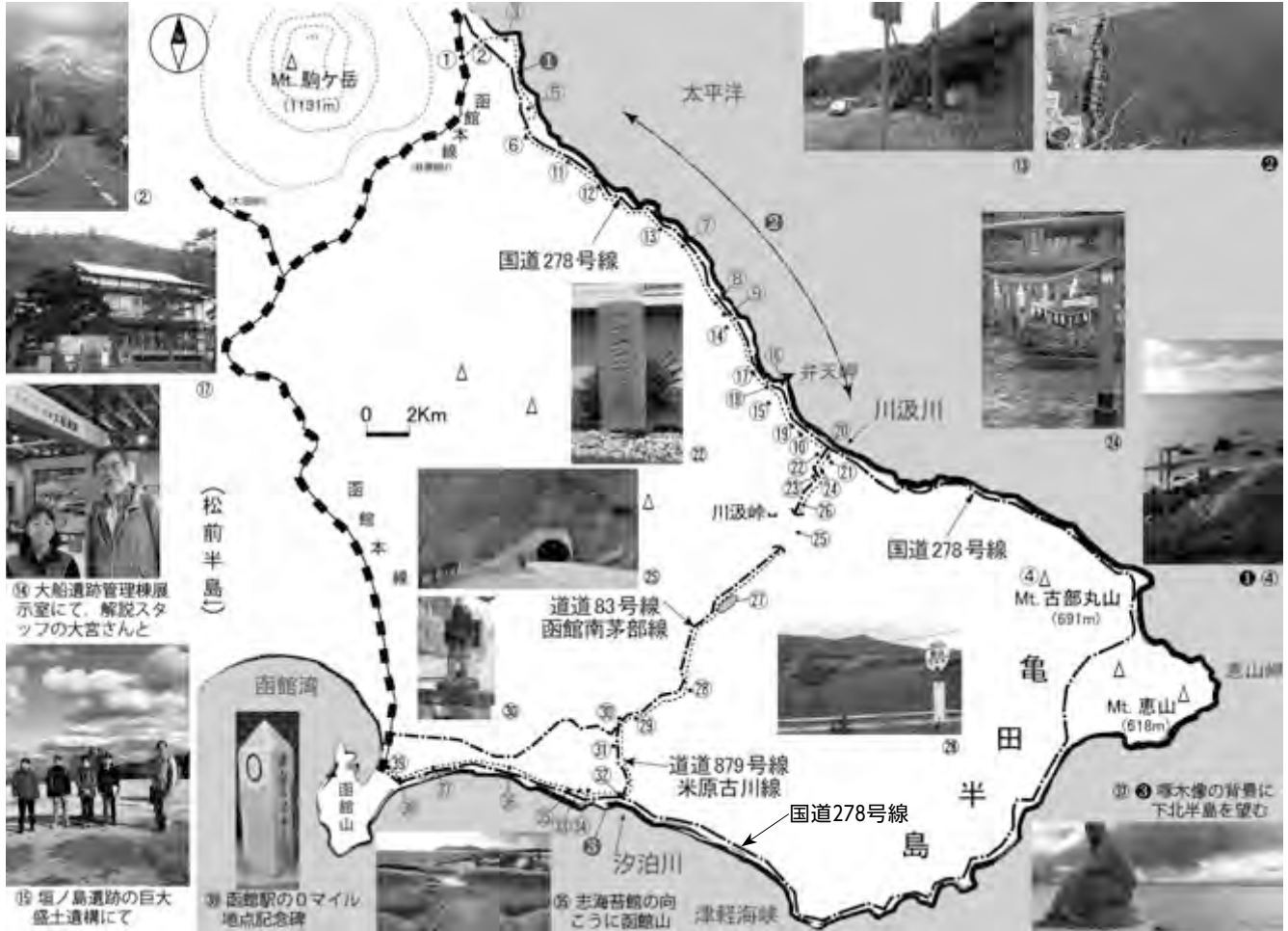
規模記念物（モニュメント）」と呼ぶことを提案しています。これから向かう函館の両遺跡のうち、垣ノ島遺跡の長径200mを越えるコの字形の巨大な盛土遺構は、まさにこの大規模記念物として評価されるものです。何世代にもわたる定住の結果徐々に高まりを増した盛土は、ある段階から当事者にもその造形性が意識され、最終的にはモニュメントとして意図的に造形化されたものです。大船遺跡の盛土遺構は、その手前で形成が終わったものかもしれません。

こうこうえきてま
「好交易的集中型集落群結合体」

舌を噛みそうな用語ですが、日常言葉に「翻訳」すると「交易好きな縄文人たちの大きなムラ」といったところでしょうか。これは三内丸山遺跡（青森県）について評価した内容です。本州島から北海道島に向かう何本かの交易路は、地理的な要因によって本州島の北端、現在の青森県の津軽海峡に面する地域にまとまってきます。交易路の要衝の地として、その地域では周辺の集落から多くの人が一所に集まってきて、や

がて大きな集落（ムラ）が形成されたと考えられます。三内丸山は、従来の研究成果で想定されていた縄文の集落規模をはるかにしのぐ人口があったと推定されていますが、それはそこで生み増やされて人口増加しただけではなく、周辺からの流入が基本的な要因であったと思われる。

では、北海道島側の事情はどうでしょうか。三内丸山に匹敵する規模の集落遺跡は発見されていません。しかし、亀田半島の太平洋岸、すなわち南茅部地区のうち、大船・垣ノ島遺跡がある大船-豊崎-臼尻-安浦-川汲-尾札部の一帯は、海岸に沿って延びる標高30~50mほどの段丘地形が発達しており、その縁辺に並ぶように、1つ1つの規模としては三内丸山に及びませんが、縄文の大集落遺跡がまさに鳩首のごとくに立地しています。私はこれらの全体をもって「好交易的分散型集落群連繫体」（これも舌を噛みそうなので「交易好きな縄文人たちのムラムラ」と口語訳）と呼び、先の三内丸山に対比されるものと考えています（拙著「生業としての交易活動」参照）。



おそらく同じような性格の遺跡群は、函館湾岸から松前半島の津軽海峡に面した一帯のどこかにも形成されていたと予測しています。また同様に三内丸山に匹敵するような規模と性格をもった遺跡も、対岸にて発見されることをひそかに期待しています。

かつてにフットパス

では、かつてにフットパスのラスト・ウォークに出発です。用意する地図もいつもの倍で、国土地理院1/25000地形図「鹿部」「臼尻」「川汲」「鉄山」「五稜郭」「函館」です。前日の晩に森町で宿をとり、朝6時06分の森駅発の列車でスタート地点に向かいます。

：図幅『鹿部』 第4回目（鷲ノ木遺跡で！）のスタート地点は函館本線砂原周りの渡島沼尻駅でしたが、今回はその一つ函館寄りの「鹿部駅」①です。雄大な駒ヶ岳を背にして②、出来潤岬に向かって歩きます。道の両側にはアルファベットで区画された名称の地区に「売地」や「〇〇様宅」（建築予定地）の立て札が散見されます。地図で確認すると、駒ヶ岳の東麓のこの一帯は、ゴルフ場を同心円状に街路が回るリゾート開発の別荘地のようです。時折、迷彩色の重車両が通りますが、山頂側には陸上自衛隊の演習場が広がっています。出来潤稲荷神社③に拝して、本別漁港に向かいます。正面の恵山岬の方角には道内最古（明治29年）の一等三角点のある古部丸山④が望めます（ビューポイント①）。当初は第2日目のコースとして、恵山貝塚や榎法華式、古武井式の土器型式名の元となった諸遺跡が点在する恵山岬方面を巡るコースも検討しましたが、コース距離がそれだけで80kmを越えてしまい、とても1日の踏破距離としては無謀なので、川汲から山越えのルート（道道83号線函館南茅部線）で函館市街地へと向かうことにしました。鷲ノ木を目指した森町域でもそうでしたが、海に面した今回のコースでも、この後も本別⑤、鹿部⑥、磯谷⑦、大船⑧、ヲタハマ⑨、安浦⑩と稲荷神社が続きます。また、これから向かう南茅部といえば「献上昆布」でもある最高級品「白口浜真昆布」が有名ですが、本別から明日の山越えルートに取り掛かる南茅部の川汲に至るまでの間、

テニスコートくらいの広さに拳大の円礫を一面に敷き詰めた場所をたびたび目にします②。これは海から採取した昆布を天日で乾燥（地干し）するための専用の干場ですが、最近では隣接して倉庫のような建物が建てられ、そこで吊るして干したり、乾燥機を用いたりする方法が多くなってきたそうです。地干しの干場には円礫の代わりに碎石を用いたものもあり、さらにそのまま昆布製品の搬出のための駐車場として転用されているものもあるようです。縄文人が昆布などの海藻をどの程度利用していたのか、はっきりとしたことはわかっていません。縄文土器には製塩土器という塩を製造した土器の存在が一部で知られています。海藻で濃度を高めた塩水を煮詰める、古代の技法として伝わる「藻塩焼き」のような方法がすでにあったのなら、その可能性もでてきます。

鹿部の間歇泉⑪、大岩の三味線滝⑫、中川を越えて函館市域に入るとすぐに国道278号線が通る巨大な切通しや、今は廃止された黒羽尻第1号トンネル跡⑬を過ぎるころには、目指す大船遺跡まで「あと8km」の案内板がでてきます。

：図幅『臼尻』 大船に入ると278号線は海岸に近い標高5m前後の低地部を南下します。道路を挟んで、海側には作業場（昆布の干場）があり、その反対側に住居が配置された、この地域の独特の敷地構成です。住居の裏手はすぐに急斜面になり、標高30～50mの崖上には縄文の集落遺跡がまさに列をなして配されています。居住空間における縄文と現在との見事なコントラストです。大船遺跡⑭の内容の詳細な説明は、福田裕二さんの「縄文時代の佇まいを感じる豊かな自然に囲まれた遺跡」（本誌No.687）に、同じく垣ノ島遺跡⑮については「史跡垣ノ島遺跡と国宝のある函館市縄文文化交流センター」（本誌No.673）に譲ります。

臼尻の弁天岬にある、海上交通の神様を祀る巖島神社⑯に拝して、すこし戻って豊崎に宿をとりました。この地域に数軒残されている、やや張り出した玄関の緩やかにカーブする破風が特徴の、趣のある建築様式の二本柳旅館⑰です。

：図幅『川汲』-『鉄山』 第2日目。臼尻から川汲に

かけては名刹が続きます。白尻には大銀杏のある覚王寺^{めいさつ}⑱、その境内には「海の守り神」の金毘羅大神^{かくおう}が祀られています。安浦の稱念寺^{しょうねん}⑲を過ぎ、川汲川を渡り、龍王寺^{りゅうおう}⑳、曹覚寺^{そうかく}㉑の周辺で、川汲峠に向かう山越えの道（83号線）に取り掛かります。278号線（尾札部道路）との交差点付近にある南茅部総合センター（旧南茅部町役場）が建つ場所には、1970年代に発掘調査された縄文前期の「ハマナス野遺跡」の石碑^{いし}㉒があります。上り坂にかかり1.5kmほどで川汲温泉^{せんすい}㉓、その少し手前に巨石に注連縄を回しただけの「十二山神」^{じふにさんじん}㉔が祀られています。本州でよくみられる「山ノ神」信仰や巨石信仰と関連するものかもしれませんが、由来はよくわかりませんでした。やがて川汲川は道路の左手にまわり、谷底深くなっています。現在は川汲峠の下に「新川汲トンネル」^{しんせんすい}㉕が開通しています。手前の「川汲峠鎮座地蔵尊堂」^{せんすい}㉖に拝して、全長約2kmに及ぶトンネルに突入。懐中電灯や反射ベストの着用をお勧めします。

トンネルを抜け、津軽海峡にそそぐ汐泊川沿いの下りとなります。川汲川の場合と異なり、谷底までの距離はそれほどありません。現在の舗装道路にはあてはまりませんが、民俗学者の柳田國男が述べた「峠の表と裏」のお話を思い出します（詳しくは柳田著「峠に関する二、三の考察」）。さて、山中に忽然とあらわれた湖（矢別ダム）^{やべつ}㉗の脇を歩き、鉄鉦石の露天掘り^{てつせん}㉘が行われている、アイヌ語地名とは異なる由来の町名の、その名も鉄山町を通り過ぎてゆきます。

汐泊川の川幅もだいぶ広がってきました。東畑、庵原^{いお}に入ると峠越えも終わりです。83号線（函館南茅部線）は278号線にかわって両地域間を短距離で結ぶバイパス的な役割をもっているのでしょうか。実際に歩いて感じたことは、現状では歩行にとっては快適・安全な道路状況（トンネルも含め）とは言えませんが、川筋に沿って登り、そして降りながら、そこに現れる風景や地元の方々との出会いには、計画的に造園された公園では味わうことのできない魅力があります。

道中多く見てきた稲荷社とは異なった趣の、巨岩の上に社を構える亀尾神社こと大山祇神社^{かめお}㉙を過ぎれば

亀尾町です。亀尾小学校の跡地に新設された酒造「五稜乃蔵」^{ごりょうのくら}㉚では懐かしい二宮金次郎の石像が出迎えてくれます。

：図幅『五稜郭』-『函館』ここで83号線を離れて道道879号線（米原古川線）に入ります。のどかな田園風景が続きます。市民農園「ふれあいの里」^{ふれあいのり}㉛を過ぎれば、もうじき河口の汐泊川橋^{しよばくがわ}㉜に到着、そこで再び278号線に合流です。ここからは海（津軽海峡）越しに、青森側の下北半島と北海道側の松前半島がすぐそこに望めます³。下北半島先端の大間原発を函館市民の方々が憂慮するのもうなずける、指呼の間という表現が相応しい30kmたらずの距離です。

ここからゴール地点の函館駅までは約12kmです。海岸沿いの道路から右手を見上げれば、函館空港の滑走路がのびる標高30~40mの海岸段丘が続いています。その一帯には、縄文早期の大集落遺跡である中野A・B遺跡^{なかつの}㉝、ストーンサークルの原型となる環状盛土遺構の縄文後期の石倉貝塚^{いさくらいづか}㉞、15~16世紀頃のアイヌと和人との歴史の一コマを刻んだ国指定史跡の志海苔館跡^{しのかい}㉟など、枚挙にいとまのないほどの多くの遺跡があります。根崎では「道南口説節」^{どうなんくどきふし}㊱の歌碑の前で一節、日乃出町では彫刻家本郷新の啄木座像^{はくもくざざう}㊲に一礼、昭和9年の函館大火で被災した狛犬が出迎えてくれる大森稲荷神社^{おおいね}㊳に拝して、いよいよゴール地点のJR函館駅（0マイル地点記念碑）^{0マイル}㊴です。

これで縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉の北海道側の全行程を終了します。歩いた距離は総延長で約200km、実際に歩いた日数は7日間です。「目的地」と自動車での移動といった効率性を優先させる固定観念から離れられれば、きっと新しい景色が見えてくるはずです。「どちらから歩いて来られましたか?」、道すがら時々かけられた挨拶です。「札幌からです」ではなく、「たぶんアフリカからです。あまりに昔のことなので、記憶にないのですが…」（本誌No.715参照）、街うことなく肩の力を抜いて、いつかそう答えてみたいものです。無事踏破。

（情報：歩行日2023.4.22~23）